

## 論文

## アニムス憑依、またはアマゾンのルーツ

## — オペラ作品の物語分析を通して —

禹 鍾 泰

昔話や神話をはじめ様々なジャンルの芸術表現において、男性と女性が出会い結婚に至るモチーフはもっとも普遍的なテーマの一つである。多くの場合は、立派な男性が美しい女性に惹かれ、乗り越えがたい障害を克服した末に二人はめでたく結ばれる形で描かれる。最終的に結婚が成立するか否か、両者のどちらが結婚により積極的だったかなどで展開が異なることはあっても、結婚そのものが中心テーマとなることが一般的であるといえる。しかし、男性と女性は社会的、文化的に生来背負っているものを異にしているし、人生経験の体験様式など、あらゆる面において異質な存在であることも事実で、いうならばまったく異なる存在なのに互いに惹かれ合うことは不思議といえれば不思議ではある。このような未知なるものへの憧れと結合への強い願望の心理をユングは 'the union of opposites'<sup>1)</sup> (対立物、または対立原理の合一)、または 'divine pair' や 'divine cyzygy'<sup>2)</sup> (聖なる対) と呼び、対立する心的エネルギーの合一が自己実現、または個性化の根本的原理であると指摘している。

心理的対立原理には様々な側面と要素がある。例えば、意識と無意識、自我と影、善と悪などは一般的に対をなして取り上げられる対立関係にある心理的要素である。しかし、対立原理のもっとも豊かかつ日常的なイメージを生み出す象徴は、男性と女性、あるいは男性性と女

性性の対比であるといえる。物語の中で結婚を通して追求されるのは、対極にある男性と女性の合一と、その合一を通して成し遂げられる対立原理の合一である。その合一こそはまさしく自己実現への心理的指向性の最たる象徴であるといえる。したがって、物語のなかの結婚のテーマは自己実現の象徴であり、個性化の象徴である。

しかし、すべての物語において中心的登場人物であり、読者に結婚することを期待させる男性と女性が常に結婚に前向きな態度を見せるわけではない。両者の間に現実的な障害があるわけでもないのに、なぜか結婚が成就できない場合が多々ある。それには様々な要因が介入しているように描かれるのが一般的だが、なかでも興味深いパターンは結婚に積極的な男性に対しなぜか結婚に消極的な女性の態度により結婚が思うように円滑に進まない展開である。結婚に消極的な女性の態度の中でも特に興味深いのは、積極的な男性のプロポーズを拒絶するパターンである。男性を拒否する女性心理は、ある意味において女性性の本質に関わるものでもあるので本稿の後半で詳細に取り上げることにするが、このように結婚に消極的な女性の態度を的確に理解することは、女性心理または女性性を理解する重要な手がかりを提供する。男性の求婚を拒否する女性の態度は様々にあるが、特に検討に値する興味深いパターンの一つに、

求婚者に対して結婚の条件として無理難題を突きつけて結果的に求婚者男性を殺害する形で排除してしまうという極めて残虐なパターンがある。本稿においては、女性性（あるいは女性の意識）のその残虐な一面に焦点を当て、さらにそのルーツについてさらなる検討を行うことにより、女性性の本質の一面に迫ってみたい。

## 『魔笛』に描かれた「夜の女王」

### —悪い母親の出現—

分析心理学的見地からみた女性の心理または女性性については、T・ウォルフ (Toni Wolff)<sup>3)</sup>の論文に大変よくまとめられている。他にE・ユング (Emma Jung)<sup>4)</sup>も女性の心理について大変示唆に富んだ著述を残しているが、E・ユングの著作は女性の内なる側面、すなわちアニムスの見地から女性の心理を論じているので、女性の意識的側面についてはT・ウォルフを参考にした方がより分かりやすいかもしれない。もちろん、T・ウォルフの説だけで女性性のすべてを網羅し理解できるとは限らないが、男性から求婚された女性が男性を拒否する心理の一端を理解する有効な手がかりとして彼女が分類した女性性が大変参考になる。T・ウォルフは、母親 (Mother) とヘタイラ (Hetaira) の軸と、アマゾン (Amazon) と仲介者の女性 (Medial Woman) の軸からなる二軸四類型の構造として女性の心理を分類している。この四類型のうちアマゾン (Amazon)こそが、女性が自らの対立原理である男性からの求婚を断るばかりか、残酷にも求婚者の命をも奪ってしまう不思議かつ冷酷な女性性の一面を理解する手がかりとなる。T・ウォルフのいうアマゾンの心理的特徴は、様々な心理的対立原理の中間的性質を示す仲介者の女性の対極に位置づけられ、競争的自我として特徴づけられる女性心理

である。アマゾンの資質の強い女性は、社会的に要求される女性の生き方を拒否し男性との関係に縛られない存在であり、自分自身の欲求により充実な生き方を追及し、社会的にも競争を好み、男性との関係においても男性のライバルとして相手を打ち負かすことにエネルギーを注ぐ女性とされている。そういった意味において、心理臨床場面における男性原理の強い女性を描写するネガティブ・アニムスという表現と重なるところの多い概念であると理解できる。このことについては拙稿<sup>5)</sup>を参照されたいが、その際に取り上げたオペラ『トゥーランドット』の主人公であるトゥーランドット姫のアマゾンの資質はまさに女性性の本質に根差す心理的エネルギーでもある。すなわち、残虐極まりない姿として描かれかねない女性性の一面をトゥーランドット姫を通して紹介し、その心理的背景を自然な女性的心理内容の抑圧に求めたものである。

オペラ『トゥーランドット』において、主人公のトゥーランドット姫は最初から求婚に応じるつもりなどなく、姫自身への求婚の条件として求婚者たちの命を要求する。結果的に求婚者男性を結婚相手としてではなく、憎むべき敵としてしか考えなかったことが後に明らかとなる。オペラでは、トゥーランドット姫自身が結婚してはならない理由をアリアの中で次のように明かしている。

この宮殿に、今や幾千年になる昔、絶望の叫びが響いた。

そしてその叫びは子々孫々を経て、ここに、私の魂に宿った。

ロ・ウ・リン姫よ、柔和にして晴れやかな祖先よ、おん身は国を治めておられた、深い静けさにつつまれ、邪心なき喜びのう

ちに、  
また屈せず、断固として立ち向かわれた、  
過酷な支配に、  
そしておん身は今日、私のうちに甦ってお  
られる！

(中略)

敗れたる国！破れたる王座！

そして我が祖先、ロ・ウ・リン姫は、そな  
たのような夷狄の男に連れゆかれ

遙か遠く、残忍な夜、そこでかの方の涼や  
かな声は消えて果てた！

幾世紀もあの姫は眠ってなざる、巨大なあ  
のお方の墓で！

王子方よ、長い旅団をくみ、世界のあらゆる  
地域より

つたなき運を投げ出しにここへまいる方々  
よ、

私はそなたらに仇討ちをなすのです、

あの清純無垢の、あの叫びの、そしてあの  
死の！

断じて何人も私を得ますまい！あの方を殺  
めた者への恐怖が、

私の心には生々しくあります！

否！断じて何人も私を得ますまい！<sup>6)</sup>

ここでトゥーランドット姫の男性拒否と不信  
の背景に、異国の男により惨い死に方をした祖  
先であるローリン姫の魂があることが明かとな  
る。前稿においては、ローリン姫の身に起こっ  
た残酷な出来事を女性全体ならびに女性性に起  
こった抑圧として理解し、その事件をトゥーラ  
ンドット姫のアマゾンの心性の背景として提案  
した。いうならば、幾千年もの長きにわたり女  
性の祖先から女性の子孫へと受け継がれる無念  
さにアマゾンの心性の背景を見たように思え  
た。実は、このように女性に降りかかった悲し  
い運命は、文学はじめ多くの芸術作品の題材と

なっており、『トゥーランドット』のようにオ  
ペラ作品でも取り上げられている。そういうオ  
ペラ作品の一つである『魔笛』でも、若い女性  
の結婚を取り巻く一連の出来事が描かれてい  
る。しかし『魔笛』の場合は、若い男女の結婚  
そのものが中心テーマであるように見えて、心  
理的には若い女性の母親と正義の具現者とし  
て描かれている男性との対立が中心テーマであ  
るところにトゥーランドットとの違いがある。  
女性心理のあり方は、女性の無意識的側面であ  
るアニムスとの関連においてさらに深く理解で  
きるはずであり、そういう意味において『魔笛』  
に描写されている母親とその対立関係にある男  
性との対比は本稿の主題であるアマゾンの女性  
心理のルーツを明らかにする重要な糸口となる  
と思う。まずは、『魔笛』という作品の成立に  
至る経緯とあらすじから概観していく。

『魔笛』は、モーツァルトによって作曲され  
た優れたオペラ作品であるが、音楽のすばらし  
さと対比される形で台本のちぐはぐさがしばし  
ば指摘される、という。また、台本が誰による  
ものかについても諸説があるようであるが、台  
本成立の経緯は特に本稿の趣旨にあまり関連が  
ないので深く追求しても意味はなく、劇や物語  
としてのあらすじを簡単に紹介するにとどめ  
る。あらすじの紹介は、いち早く『魔笛』を心  
理的に取り上げたEノイマン<sup>7)</sup>のまとめが  
非常に簡潔かつ分かりやすいので、それを中心  
に、また本稿の分析の対象になる箇所を絞って  
紹介しておく。

森にまよいこんだ異国の王子タミーノ  
は、夜の女王の三人の侍女に、夜の女王の  
娘パミーナの絵姿を見せられ、たちまち激  
しい恋に落ちる。夜の女王は娘パミーナが  
叡智の神殿を司るザラストロに奪われたこ

とを嘆き、タミーノにそれを救い出してくれるように頼む。タミーノは陽気な鳥刺しのパパゲーノを伴い、魔法の笛と魔法の鈴を与えられ、三童子に導かれてパミーナ救出に赴く。

道中タミーノは、神殿の人間からザラストロが実は徳の高い聖人であり、邪悪な夜の女王からパミーナを守るためにここにかくまっていることを知らされる。

(中略)

パミーナは忍びこんだ夜の女王から短刀を渡され、ザラストロを殺すように命じられるが、出会ったタミーノが無言のままであるのに悲観して自殺を計る。しかし三童子が真相を告げて止める。やがてタミーノとパミーナは相携えて火と水の試練をくぐり抜けて結ばれ、パパゲーノも約束された恋人パパゲーナを得る。夜の女王はザラストロ暗殺に失敗して滅び、ザラストロを中心に僧たちは、光の勝利を唱う。

K・トムソン<sup>8)</sup>によると、『魔笛』の台本はモーツァルトが最初に依頼を受けた時のものを途中で書き換えられたので、その結果プロットに辻褄が合わない箇所があるという説があるという。したがって、モーツァルトは途中まで進めていた作曲をやり直すしかなく、そのことが作品全体に残るちぐはぐさの原因であるという説もあるが、それについても諸説があるのでどれが正しいかは断定ができないともいう。どうやら完成版の台本の初版を執筆したとされる有力な人物は役者兼劇場支配人のエマヌエル・シガネーダーで、後に書き直した可能性があるのは役者であり鉱物学者のギーゼッケという人物だろうと推測されているようである。台本に残る数々のフリーメイソンの要素はギーゼッケによるものではないかと推測される向きもあること

も、自然科学的思考の影響が強いフリーメイソンの思想とも矛盾せず、それなりに説得力がある。一方、E・ノイマン<sup>9)</sup>も『魔笛』の台本についてフリーメイソンの強い影響について指摘しており、次のように記している。彼は、「『魔笛』のテキストについては、古来諸説さまざまに分かれるところだが・・・」と前置きしつつ、「シカネーダーが・・・寄せ集めて作りあげた台本は、モーツァルトが半ばまで作曲したところで、突如くつがえされ、全面的に作り直されることになる。」と書き、さらに「・・・基本的な構想が、おそらくはモーツァルト自身によって、ひっくり返されたわけだが、・・・」とも語りながら、台本の書き直しを前提に論を進めている。台本が書き直されたか否か、書き直されたとすれば誰が書き直したかという問題はともかく、当然浮かび上がる疑問はどのようなストーリーがどのように書き換えられたか、また何の理由で書き換えられたか、である。この疑問についても種々議論はあるようだが、大筋では重大な相違はなく、寓話的性質のものと筋書きに、フリーメイソンの思想と要素が色濃く反映された台本へ書き換えられたとする説が有力である。

台本の書き換えについて前述のK・トムソンによると、シガネーダーが『魔笛』の脇役であるパパゲーノとパパゲーナを中心とする場面のほとんどを書き、前述のようにギーゼッケの書き直しの際にフリーメイソンの寓意物語にすることをモーツァルト自らが提案し、最終的に台本にフリーメイソンの儀式的場面などが加えられ完成した、とある。ということは、もとはコミックな配役が活躍する寓話であった台本にフリーメイソンの理想を追求した様々な要素がささか無理に加味され、その結果として今日伝わるような若い男性が理想とする女性と結ばれ

るために試練を克服する壮大な参入劇として仕上げられた、ということとなる。いうまでもなくそのストーリー全体を支配する思想は、太陽を背景とした正義と夜の支配者である邪悪な力との対決であり、それは強いフリーメイソンの影響によるものである、ということである。

台本修正の作業に影響を及ぼしたフリーメイソンの思想については、E・ノイマンもK・トムソンのそれと大筋ではほぼ同様の指摘をしており、両者の記述には特段の矛盾も見当たらず、台本の書き直しの事実とその内容については概ね共通の認識がもたれているとあってよさそうである。修正された台本の内容と、その方向性の心理学的意味についてはE・ノイマンの解釈が想像力豊かなものであり、非常に納得させられるものである。まずは、E・ノイマンの指摘する台本修正の内容と方向性について紹介しておく。E・ノイマン<sup>10)</sup>は、最初の台本の基本構造を善良な妖精と邪悪な魔法使いという童話的対立であると規定している。この基本構造にモーツァルト自身の意思も加わることによって重大な逆転が生じたと指摘し、それが結果的に書き直された台本における男性的人物と女性的人物の対比の逆転であるという。さらにこの逆転を引き起こしたのは、フリーメイソンの思想と理想の追求に他ならないと結論づけている。このような台本書き直しには、モーツァルト自身がフリーメイソンの一員であったことも大きく影響を及ぼしているだろうとも推測されているが、このことは台本書き直しの主体がモーツァルト自身であったとする共通した指摘とも合致する見解であり、興味深い。

フリーメイソン自体についてもその発生の経緯などについて諸説があるし、当初より秘密結社を標榜したこともあり、その素顔は謎めいて

みえるところがあるとされる。しかし、その主張や哲学などは比較的に明らかにされているようである。その発生はヨーロッパ錬金術（薔薇十字会錬金術）の流れをくむ動きとしての性質があるようで、自然科学崇拜とともに秘儀（密儀）崇拜の特徴を有していたとされる。信念体系としては、啓蒙主義、合理主義、理性、正義と叡智に対する信奉を特徴とし、自由と平等を成就することを目指し、最終的には人間が失った楽園の再構築、あるいは人間の神化を究極の目的としていたようである。さらに彼らは、理想とする世界に参入するための試練を伴う様々な参入秘儀体系を重んじるところがあり、古代信仰が超越神を中心とする〈啓示宗教〉であるとすれば、フリーメイソンは退位した神の座に人間の理性を据える〈理性宗教〉としての一面があったともいわれている<sup>11)</sup>。そういう理性崇拜ともいえる信念体系から考えると、秘儀重視の体系は彼らの理念と矛盾しているとも思えるところではある。いずれにしても、『魔笛』には彼らの理想とする様々な儀礼的行いや象徴的事象がちりばめられていることがわかるし、そういう意味において『魔笛』こそはフリーメイソンの理想を描いた傑作であるといっても過言ではないだろう。

理性を中心に据える啓蒙主義的フリーメイソンの強い影響と、おそらく寓話的色彩の強かった『魔笛』のもとの台本が書き換えられた結果とも関連があるだろうと推察される心理学的意味転換について、本稿の目的との関連において特に意味深いと思われる二点に触れておきたい。まず一点目は、ザラストロと夜の女王の性格的対比の問題である。これは善と悪の対立構造を成しているテーマでもある。第一幕冒頭のところで、夜の女王は旅の王子であるタミーノに向かって自身の娘をさらっていった野蛮な男

であるとザラストロのことを説明する。しかし、実は、ザラストロは邪悪な母親から善良な娘を守るために、さらうどころかむしろ保護していたことが後半において明らかになる。後に、彼は太陽の神殿の守護者であり、高潔な人格の持ち主であり、正義の実行者であることがわかる。また、ザラストロは亡くなったパミーナの父親、夜の女王の亡き夫、の親友であったことも明かされ、父性の体現者としても描かれている。こういう描写によって、ザラストロを光の世界と善の具現者として理想化し、対照的に闇の世界の支配者であり悪の象徴としての夜の女王との対比、すなわち善悪の対比を印象づける展開に発展する。これは父親と母親の性格の対比でもあり、男性と女性の対立関係の対比でもある。すなわち、男性は善とフリーメイソンの理想とする啓蒙主義的理性の具現者・父親として位置づけられ、対照的に女性は邪悪な暗闇の世界を象徴する存在として位置づけられ、母親がその役割を担うところはとても興味深い。

この母親としての夜の女王の性格づけが、『魔笛』におけるフリーメイソンの思想の影響と、おそらく書き直しの結果とも関連があるだろうと思われる二点目の心理学的転換であるといえる。夜の女王は、第一幕第六場で野蛮な男にさらわれた娘を取り返したい一心で、旅の王子であるタミーノにすぎるように娘を取り返してくれることを懇願する。この際のアリアの音楽と歌詞自体が大変優れているので、普通程度の表現力をもつ歌い手なら誰でも大きな感動をもたらすことができるのではないかと思ってしまうほどで、聴衆は誰でもこの気の毒な母親に同情せずにはいられなくなる。しかしその後、この気の毒な母親だったはずの夜の女王は魔女的本性を隠し切れず、娘を脅し、ザラストロ殺害を迫っていく。このあたりの夜の女王の描かれ方

は、我が娘の安否を気遣い娘の人生を案ずる母親ではなく、すでに父親的存在であることが明らかになったザラストロへの怨念と憎しみに囚われた魔女に他ならない。第二幕において娘パミーナにナイフを渡し、ザラストロを亡き者にできなければ親でもなければ子でもないと言い放つところは、通常の母娘関係が維持できる母親ではない印象を決定的にする。本来は我が娘を憎き男にさらわれ悲嘆に暮れる可哀そうな母親が、実のところは恐ろしい魔女としての資質に満ちた自らの怒りに目がくらんだ母親であることが明らかになる。このような夜の女王の姿をE・ノイマンは「夜の女神」、「グレート・マザー」と命名しているが<sup>12)</sup>、頷けるところである。結論的にいえば、寓話としての性格を帯びた『魔笛』の原話をフリーメイソンの哲学に基づいて書き換えた結果、娘を捕られた可憐な母親だったはずの夜の女王は怒りと復讐への衝動に駆り立てられた恐ろしいだけの母親へと変容させられたといえる。

### 貶められた女性性： 自然な母性から悪い母親への変容

フリーメイソンの思想の影響により書き換えられ完成した『魔笛』には、フリーメイソンの最高価値である啓蒙思想の守護者としてザラストロという父親的人物を理想化し、その対極に魔女的資質をもつ悪い母親として描かれる夜の女王が配置されている。この対立構造は表面的には父親的人物と母親的人物の対立であるが、心理学的には父性と母性の対立であり男性性と女性性の対立である。結果的に『魔笛』で描かれている対立関係は男性性と女性性という心理学的対立に還元され、女性あるいは女性性は著しく否定的な価値を請け負う構造となっているといえる。ストーリー全体の展開や登場人物の性

格づけが女性に対する否定と不信であるばかりではなく、至るところに母性と女性性に対する不信を強く印象づける仕掛けがちりばめられている。まずその典型的な場面と思える第一幕第十五場を取り上げてみたい。

タミーノは道案内役の三人の童子に導かれザラストロが治める神殿にたどり着く。この神殿の入口には右に「理性の神殿」と左に「自然の神殿」と書かれており、ここですでに男性的原理と女性的原理の対立が印象づけられている。分析心理学的には「理性は男性心理を構成する心理的要素」<sup>13)</sup>であり、自然または自然な心の状態は女性心理の本質と深く関わる要素であるので、この神殿はその構成からして対立原理が統合される場所であると分かる。すなわち、ユングのいう人間心理が個性化に向かうまさにその場所であるとわかる。そこでのタミーノと神官（声）のやりとりが非常に印象的である。この場面まではタミーノはまだ夜の女王からいわれたことを疑わず信じ、暴君であるザラストロのせいで夜の女王は嘆き悲しみ打ちひしがれている不幸な母親であると神官に告げる。そのタミーノに対し神官は、「それでは女があなたをだましたのだな。女というものは口だけで、行いが伴わぬのだ。若者よ、あなたは女の口からの出まかせを信じるのか。ザラストロがあなたになぜそうしたかを話せばよいのだろう。」<sup>14)</sup>と語り、タミーノを悟らせる。この会話には根深い女性心理に対する不信が感じられる。

『魔笛』の最初の解釈である1794年の論文の中で、フリーメイソンの一員であったルートヴィヒ・フォン・バッコーは、夜の女王が「迷信」を、パミーナが「啓蒙運動」と「尊敬すべき理性の子」をあらわすと解釈したとある

が<sup>15)</sup>、このように娘を奪われ悲しむ母親に魔女イメージを投影したことも女性不信と同じ脈絡で理解できる。一方でパミーナは同じ女性でありながら「理性の子」として解釈したところは、母親に与することなく、父親の教えに従順である限りは娘であっても理性を身にまとったフリーメイソンの一員として迎え入れることが出来ると宣言しているようでもある。言い換えると、母親の子か父親の子か、父親の教えに従い理性を重んじる子か母親の世界に止まり自然の心のままでいる子かが問われているともいえるだろう。バッコーのパミーナに対するこの意味づけは、やや微妙な問題でもある。というのも、女性であるパミーナを啓蒙運動と理性の子として位置づけたことは、考えようによっては女性に対する不信・否定という『魔笛』全体の哲学と矛盾しているようにも思えるからである。しかし、バッコーのパミーナ評価が無条件の女性に対する評価ではないということも指摘しなければならない。この評価には厳しい条件がある。パミーナは母親である夜の女王の娘ではあるが、母親から母娘であり続ける条件として提示されたザラストロ殺害を拒否し、父親的人物であるザラストロの世界に参入することを選択するのである。すなわち肉親としての母親を拒否し、高い精神性を選んだという風に描写されている。ここにパミーナが女性でありながら「自然の子」ではなく「理性の子」として評価され得た厳しい実態がある。これによってパミーナは女性本来の自然な心である女性性を放棄し、フリーメイソンの男性性の領域である理性の子として生きることを選んだことになり、これが『魔笛』において女性性に突きつけられた厳しい試練、すなわち女性性の抑圧と否定に他ならないと考える。

パミーナが母親の世界に止まらず、父親的な

精神世界に参入したことによるもう一つの因果は、母から娘へと伝達される女性心理の断絶であるといえる。娘が母から受け継ぐ心理的内容は、元型的レベルから現実的レベルに至るまで様々にある。その中でも本稿のテーマであるアマゾン的な女性心理、言い換えると男性を拒否する女性的な心理も、女性本来の心理的内容として母から娘へと受け継がれるものであるといえる。しかし、パミーナは母親である夜の女王から父親否定のエネルギーを受け継ぐ代わりに、父親の世界の秩序として理性を受け入れることを選択した。ここにおいて夜の女王から娘パミーナへと受け継がれる心理的エネルギーの連鎖は断ち切られることとなる。そういう意味においてパミーナを選択はトゥーランドット姫のそれとは対照的である。トゥーランドット姫の場合は、母親的存在であるローリン姫からの恨みの連鎖を断ち切ることをせず、むしろ自らがその恨みを継承し、ローリン姫に同一化し、アマゾン的な女性性を体現する。パミーナとトゥーランドット姫の対照的選択は女性性のあり方を考える上で興味深い示唆を与えてくれる。

『魔笛』における女性性否定の問題と深く関連しているもう一つの不自然な女性描写は、母親としての夜の女王の性格づけにある。夜の女王がいかにして否定的母親の姿に仕立てられたかについてはすでに幾度か指摘したところである。ここで検討に値することは、自然な母親、あるいは太古の母娘結合と夜の女王の母娘関係との対比の問題である。E・ノイマンは、台本の書き直しの結果によって夜の女王の性格づけをも変えられたのではないかと考えているようである。第一幕において幾分か肯定的な母親としての姿が残っているように見えるのは、魔女的母親ではなかった草稿の影響ではないかと

考えているようで、対照的に第二幕においては完全に否定的な母親の姿しか残されていないと指摘する。この指摘は大変興味深くはあるも、台本改編の結果如何に関わらず重要な連想を刺激する。それは、分析心理学的見地から自然な形の母娘結合、または太古・原初の母娘結合としてイメージするギリシア神話のデメテルとペルセポネの母娘関係と夜の女王との対比である。E・ノイマンの指摘を借りれば、夜の女王とパミーナの母娘関係の発端は、「デメテルとコレー（ペルセポネ）およびコレーの掠奪という神話に見られる元型的な布置に対応しており、」<sup>16)</sup>ということになる。これは大変興味深い指摘で、元来はデメテル親子のような元型的母娘関係だった夜の女王とパミーナの関係が、おそらくという条件つきではあるが、書き直された台本では魔女的資質を帯びた母親とその母親から自立し自らの理性に開かれていく娘の姿に変質している、ということとなる。もちろん、この母娘関係の変質をもたらしたのはフリーメイソンが理想とした思想であることはいうまでもない。デメテルは娘コレーをさらっていった野蛮な男性であるハーデスと対置する。一方で、いわば元型的な母から変質した夜の女王はグレート・マザー化して娘パミーナを操り正義の守護神であるザラストロと対置する。この二パターンの母親の性格づけは、善と悪の対立関係の逆転をもたらす結果となる。それは善良な母親（デメテル）から邪悪な母親（夜の女王）への変容であり、男性と女性の性格の逆転でもある。そして、この微妙かつ複雑な変容のプロセスが、先述の第一幕第六場の一曲で表現できたのは台本と音楽の素晴らしさの効果であろう。この母親の性格づけの逆転が『魔笛』において起きていて、その変質をもたらした一因がフリーメイソンの思想ということであろう。



女性心理の否定と抑圧の問題と関連したもう一つの興味深い見解は、前掲のT・ウォルフの論文で紹介されている<sup>17)</sup> Hans Blüherの“two female structural forms”(女性の構造的二形態)である。ここでは、二通りの女性のあり方、あるいは生き方として“consort”(配偶者)と“free woman”(自由な女性)が提示されていて、その象徴的なイメージとしてギリシア神話のペネロペイア(Penelopeia)を「配偶者型」に対応させ、カリプソ(Calypso)を「自由な女性型」に対応させている。おそらくこの分類は女性による男性との関係の結び方・関わり方を軸にしたものであろう。ペネロペイアとカリプソは、いずれもギリシア神話の英雄オデッセイウスの波瀾万丈な生涯においてもっとも意味ある二人の女性であるが、その性格は非常に対照的で、対極にあるといえるキャラクターである。ペネロペイアはオデッセイウスに求められて妻となった女性であり、オデッセイウスがトロイア戦争に赴き留守中ずっと夫の帰りを待つ一途な妻として描かれている。夫の留守の間にペネロペイアの身に起こった出来事など彼女のその後のあり方についてはいくつかのバリエーションがあるが、彼女は夫が戦死したという噂にもかかわらず待ち続ける女性として特徴づけられている。一方のカリプソは、オデッセイウスがトロイア戦争の後、妻の待つ故郷に帰る船旅の途中で難破し遭難した際に彼を助けた女性でありその島の支配者でもある。カリプソはたちまちオデッセイウスに夢中になり、呪縛し、手放そうとしなかったが、最後は神々に説得され(強制され)彼を故郷に帰らせたといわれる。この二通りの女性イメージは、限りなく夫に従順な妻の元型と、自分の意思で男性を選ぶ自由な魂の、その意味において自然な心をもった女性の元型として対比的に理解して良いと思う。いうならば、男性によって選ばれる女性と、自らが男性

を選ぶ女性の対比ともいえるだろう。

この二通りの元型的な女性イメージの運命を、ここで論点となっている女性性に対する否定と抑圧の側面から想像すると、女性性が男性性優位の思想的・社会的判断の対象となった場合には、当然のことながらカリプソ的「自由な女性型」が否定され抑圧されやすいだろうことが容易に推察できる。比較的従順な母親のデメテルと、男性心理や父性に対する敵対心をあらわにし挑む夜の女王との対比では、夜の女王は劇の最後の場面で父親の理性の守護者であるゼラストロによって奈落の底に落ちこの世から排除される運命を辿ることとなった。母として、あるいは女性として、男性性と父性にとって脅威となるものは排除されることによって抑圧される対象となる。女性でありながらパミーナがゼラストロの父性の世界に歓迎され迎え入れられたのは、彼女が母性原理を拒否し父性原理に従順な娘であることが証明されたからである。その脈絡でペネロペイアとカリプソの運命を想像すると、ペネロペイアの方が男性に従順な配偶者であり、男性心理である男性性との対立も避けられる女性であることから排除される危険性は低いと推測できる。その反面、カリプソのように自らが意思をもち好ましい対象を自分で選ぶような扱いにくい女性とその心理は排除の対象になる運命が待ち受けるのだろう。女性本来の自由な心と、男性と男性心理に対抗的な女性とその心理は「選択的抑圧」の対象となり、結果的に女性心理の中の自由奔放なエネルギーは抑圧され剥奪されるといえるだろう。

いうまでもないことで、このような女性とその心理に対する抑圧の問題は、現実の女性に対する態度や傾向として考えるべきではない。この問題は心理的なレベルの現象として理解され

なければならず、この問題を検討する際は現実的レベルと象徴的レベル（心理的レベルといってもいいだろう）の相違を理解することが肝要である。人間とその心理を論じる際に、生物学的レベルでの人間の特徴とその身体の内側にある心理精神的エネルギーの特徴を明確に分けることが大事であるが、常に容易なことではない。男性と女性の心理、女性と女性の心理を論じることも同様である。また、象徴的なレベルで心理を論じる際に、生物学的人間と人間の心理的特徴と敢えて区別せず重ねて表現する場合もあるので、誤解を招く恐れもあるかもしれない。さらには、ここで取り上げた女性と女性心理に対する抑圧のようなテーマとなると、現実の女性が迫害の対象とされてきた人類の歴史的な様々な文化的出来事が思い浮かび現実の女性に対する迫害や抑圧と重ねてイメージしても矛盾が感じられないので、なお誤解が進むこともあるだろう。女性性の抑圧という表現は生物学的な女性ではなく、女性らしさともいえる女性的心理を意味する。

### アマゾンのルーツ：男性心理拒否の深層

『魔笛』というオペラ作品を通して女性的心理が否定され抑圧される心理的経緯について概観する作業を通して、拙稿<sup>5)</sup>で取り上げたトゥーランドット姫がアマゾンの資質を身につけるに至った背景と関連していくつかの気づきが得られたように思うので、ここでまとめてみたい。

これまで三組の母娘関係を取り上げてきたことになる。まずは、「トゥーランドット姫」とその祖先である「ローリン姫」（直接の母親ではないが、心理的には母親的存在といえる）、次に「夜の女王」とその娘「パミーナ」、最後

にギリシア神話の女神である「デメテル」とその娘「コレー（ペルセポネ）」の三組である。この三組の母娘はいずれも男性、または男性の心理的側面との間で強烈な葛藤を経験する。この三組の母娘が経験したであろう心理的状況を想像しながら、時間軸に沿って事件の発生とそれに対する心理反応を中心に追ってみると事態が少し飲み込みやすくなるかもしれない。

まずは、ローリン姫の受けた悲惨な出来事とそれに起因する彼女の恨みを位置づけるとする。心理的にはローリン姫とコレーの経験は同質なものであるので、この心理的動きはコレーが内的に体験したものと同じであるといえる。この段階の心理的理解は、ローリン姫の場合は自らが治める領土に攻めてきた夷狄の男によって、コレーの場合は野蛮極まりないハーデスによって母娘の原初の結合が切り離されたことになる。この原初の段階で彼女たちが経験した男性性は理性のような洗練された形のものではなく、ただ野蛮で破壊的ただけだったはずで、多分に動物的で衝動に満ちた力だったに違いない。それだけに、この段階で彼女たちが経験した男性性は彼女たちにとっては抗うことが出来ない恐怖の対象でしかなく、母から娘を切り離すだけのエネルギーといえるだろう。

次は、娘との平和を壊され樂園を失ったデメテルと夜の女王の怒りの段階いえる。興味深いのは、デメテルと夜の女王の反応は若干、見方によっては大変、異なるところがあって、夜の女王は幾分か悲しみと圧倒させられるほどの怒りをもって事態に反応する。彼女は自分から娘を奪っていったザラストロを殺害することで、自身の怒りに対処しようとする。一方で、デメテルは娘を奪われた後に娘を取り返すためにできる限りの努力をするが、最終的に完全に

は娘を取り戻すことは出来ないことが分かる  
と、娘と離れて暮らすしかない冬の間は隠遁の  
道を選び、夜の女王のそれとはだいぶ違う反応  
を見せる。隠遁が完全に怒りが介在しない状態  
とは限らず、受動的怒りの状態といえるところ  
もあるが、二人の母親の反応の違いは興味深い  
ところである。

次に最後の段階として連想されるのは、最終  
的に自分たちの内面に眠っていたアマゾン性に  
完全に目覚めた女性たちである。厳密に言えば  
三組の母娘全員がアマゾン的であっても不思議  
ではないが、とりわけ明確にアマゾンとしての  
反応を示すのはトゥーランドット姫であり、夜  
の女王である。二人のたどる道は異なり、トゥー  
ランドット姫は最後の場面において我慢強い男  
性の助力もあって、内面に眠っていた自然の摂  
理に通じる女性性を回復するが、最後まで自身  
の破壊性に気づかなかった夜の女王は破滅の道  
をたどることとなる。男性性の側面からであれ、  
女性性の側面からであれ、怒りと攻撃性を中核  
とするエネルギーを抱えて生きることは大変困  
難なことである、ということだろう。内的と外  
的な事件の生起と、それらに対する心理的反応  
と内的体験を連想しながらアマゾンの女性の心  
理の背景をたどると、以上のようにいえるかも  
しれない。

一方、アマゾン心性のルーツという観点から、  
心理的経験を軸に三組の母娘の組み合わせを交  
えてみると、さらにアマゾン心理のルーツに迫  
るような気がする。いずれの物語においても、  
娘の方が男性から一方的に好意を寄せられる  
が、パミーナだけは自身に好意を寄せてきた男  
性と結ばれることを望むが、他の二人、トゥー  
ランドットとコレーは男性を拒み寄せつけない。  
トゥーランドットに至っては求婚者すべて

を殺害してまで男性と結ばれることを拒むが、  
男性に残酷で冷徹なトゥーランドットの態度こ  
そがT・ウォルフのいうアマゾン心性をもった  
女性であるとされた<sup>18)</sup>。一方、三人の母親たち  
の方は、夜の女王とデメテルは娘を奪われたこ  
とに激しく反発し怒り悲しむが、ローリン姫の  
場合は自らが男性の野蛮な行為の犠牲者なの  
で、母親の立場というよりはむしろ他の二組の  
母娘関係と対比して娘の立場の母親であると理  
解した方が適切であろう。すなわち、トゥーラ  
ンドット姫とローリン姫は他の二組の母娘と比  
較して立場が逆転していると考えた方がいいと  
思う。

すると、ここに自身が男に侵入され犠牲とな  
り怯える娘の立場におかれた二人の女性と、娘  
が男の野蛮性の犠牲になったために悲しむ母親  
的立場の二人の女性の姿が浮かび上がる。ロー  
リン姫とコレーの二人は男性の野蛮な侵入によ  
り怯える娘の立場であり、夜の女王とトゥーラ  
ンドット姫は娘が野蛮な男に蹂躪されたために  
嘆き悲しむ母親の立場である。先も触れた通り、  
トゥーランドット姫とローリン姫の場合は、現  
実的な母親としての立場と娘としての立場が、  
心理的立場と逆転していることを想起する必要  
がある。心理的な母親としての立場に立つ二人  
が、娘の身に起こった不幸な出来事に悲しみ打  
ちのめされた末に男性たちへの反逆に転じた姿  
が、オペラ作品に描かれたトゥーランドット姫  
と夜の女王であるといえる。そして、この二人  
の母親役の女性たちの悲しみと怒りにアマゾン  
的女性心理のルーツがあるといえる。さらに、  
興味深いことにトゥーランドット姫は現実的  
には自らがアマゾン的な心性の持ち主であると同  
時に、母親的悲しみと怒りの体験者である心理  
的側面においてはアマゾン心理のルーツでも  
ある、ということも指摘しておきたい。

なお確認しておくべきことは、彼女たちが経験したことは象徴的な次元で理解されるべきである、ということである。彼女たちの経験は、内的な体験の範疇を超えて象徴的なレベルで理解されると、さらに示唆するところがあるはずである。これについては、悪い母親への変容のところでも触れたが、可哀想な娘たちの身に起こったことは人間女性としての尊厳を害されたとか安全を脅かされたといったレベルではなく、自然な心の持ち主としての存在を脅かされ否定され、またそれに対する怒りないしは自己保存への本能的営みがアマゾン的資質となって現れたと理解されるべきである。そういう意味において、女性心理の一角を占めるアマゾン心性とは、自然な心理状態を保ちつつ自己保存の循環を営む女性の内的状況が、まだ理性や論理のレベルまで洗練され成熟しておらず野蛮な力の側面だけが際立つ男性性の侵入により破壊されたことを発端とし、その男性性に対して女性的エネルギーが反撃に踏み切る心理として理解されるべきである。

ここで、三組六人の女性のなかで、唯一安全を脅かされず、野蛮な男性の犠牲になることもなく、怒りに圧倒され身を滅ぼすこともなかった女性がいることに気がつく。いうまでもなく、その女性とは夜の女王の娘であるパミーナのことである。一点だけ不幸な体験として理解すべきかと迷う微妙なところは、結果的には母親である夜の女王がザラストロという父性的人格によってこの世界から消え去ってしまったことである。母親と引き裂かれた事実がパミーナにとってどのような内的体験になったか、また不幸な体験ではなかったのかという疑問は残るが、不思議と最後の場面で起こったその出来事がパミーナを悲しませたという描写はない。母親が魔女的資質をもった人なら、おそらく永遠

に、消え去ることは悲しむべきことではないということだろうか。人間として、また女性としてのパミーナの複雑な心理を描こうとしなかったフリーメイソン思想に捕らわれた男性の無神経さがここに示されたのかもしれない。しかし、パミーナが悲しまなかったことが他の女性とは異なる彼女特有の心理を際立たせる要素ではあるので、より明確な比較分析を可能にするともいえる。

パミーナは、娘の立場にある他の二人（ローリン姫とコレー）とは異なり、男性との間の際立つ葛藤は経験しない。そればかりか、むしろ自分を求めるタミーノと結ばれることを自らも望み、タミーノの態度が冷淡だと感じると死にたいと思うほどである。なので、男性を拒否する必要などない。男性との間に葛藤がないためか、彼女から男性に対する恨みも感じられず、アマゾン心性とも無縁である。最後はタミーノとめでたく結ばれ、おそらくフリーメイソンの結社にも受け入れられたはずである。娘の立場にある他の二人の女性、ローリン姫とコレー、には起こり得なかったことがパミーナに実現した条件は単純で、それはパミーナだけが父親的存在から突きつけられた条件を受け入れたからであろう。パミーナだけが男性原理を受け入れ、父性原理に従順になり、男性的心理との対立も起こさなかったとみえる。このことが意味するのは、おそらくパミーナは自らの女性的心理である自然な心を抑制し、母親との結合関係も解消し、フリーメイソンの、あるいは男性的理性に従順である道を選んだ、ということだろうと思う。端的にいえば、自らの女性的な自然の心を放棄し、男性原理に従順になりその一員となる道を選んだ、ということである。母性と父性の中でパミーナが葛藤する場面が描かれてはいないが、母性に背き父性の世界に参入することに

大きな躊躇はなかったかのように描かれている。葛藤をほとんど体験せず、男性なるものとの対立も解消し、男性の世界との和解が成立したことが、高い次元での女性としての個性化なのは断言出来ないが、いささか安易であるような印象は否めない。

## アマゾンの意識と、アニムス憑依

冒頭でも触れたように、分析心理学的な見知から女性の心理・女性性について論じた代表的な著述の中でも T・ウォルフと E・ユングの仕事は特に興味深い。T・ウォルフは女性の心理 (Feminine Psyche) を意識のレベルで取り上げているのに対し、E・ユングは女性の無意識であるアニムスの側面から女性の心理を分析している点において、両方の仕事を補完的視点で取り上げることは意義深いと思う。まず、T・ウォルフの分類した四類型の女性心理 (母親、ヘタイラ、アマゾン、仲介者的女性) のうち本稿の検討対象であるアマゾンの本質は、女性性の本質である関係重視、あるいはエロス原理、に捕らわれないところにあるといえる。分析心理学的に女性の心理を分析する際に、常に用いられることはないが、実は非常に豊富な示唆を与える概念であると思う。アマゾン心理が優位な女性の具体的生き方のイメージは、男性の妻の座に安住するより自分自身の成功を志し、競争的な態度により男性にとっては脅威と認識されがちであるといえる。リビドーが自身の求める価値と人生目標に直接向かうので、この類型の心理が強すぎ活性化されすぎると、女性心理・女性性本来の資質である関係性を損ねる危険性があることは容易に推測できるところである。本稿で取り上げた二つのオペラ作品の主人公の心理をアマゾン的であるとしたのは、こういうアマゾン類型の本質に起因する。トゥーラン

ドット姫や夜の女王の男性に対する敵対的姿勢はまさにアマゾン・イメージの具現であると思える。もう一点付言しておきたいことは、T・ウォルフの四類型は補完的な関係にある、ということである。どちらか一つの類型だけが一人の女性の心理を完全に支配することはあり得ず、どちらか一つの類型が他の類型より比較的優位であり、他の類型は相対的に人格の裏面に隠れがちになっているだけである、ということである。トゥーランドット姫や夜の女王にも備わっているはずの他の三類型の女性らしさは、眠っているだけであることを想起する必要がある。

アマゾンのイメージに関連して、女性の無意識のイメージ、または女性の無意識を人格化したイメージに注目した E・ユングの「アニムス」論も大変興味深い。彼女は女性の無意識的側面である「アニムス」に、発展・成熟・深化のイメージをもたせた四段階を想定している。それは、「力」のアニムスから始まり、「行為」と「言葉」が続き、最後に「意味」のアニムスへと移行する四段階である<sup>19)</sup>。この四つの段階のうち女性心理のアマゾンと比較的に深い関連があると思われるのは力のアニムスと行為のアニムスであり、厳密には力のアニムスとのより密接かつ直接的な関連を見出すことが出来る。力のアニムスの具体的イメージとして提示されているのは、スポーツマンや社会的に成功した人などであり、行為のアニムスの具体的イメージとして提示されているのは強い意志、信念、行動力などである。ここにおいてアマゾンと力のアニムスがかかなり近似した概念であることが分かる。女性の心理のある種のエネルギーに対して、意識側から見た場合にはアマゾンとして、また無意識側から見た場合には力のアニムスまたは行為のアニムスとして理解することができる

いうことである。

さらに、E・ユングは、女性自我が自身のアニムスに一体化または同一視してしまい、まさしくアニムスに取り憑かれた状態をアニムス憑依と呼び、アニムス憑依の状態を「それは最も禍の多い状態である。」<sup>20)</sup>とし、警戒している。また、M-L・フォン・フランツは、この状態にいる女性を「アニムスに支配されている」<sup>21)</sup>ともいい、女性が生命から切り離されている感じを与えともいい、同様の描写をしている。この状態は、心理臨床の場面で遭遇するある特定のタイプの女性の心理状態、例えば物事に対する批判的すぎる見方を持ち、競争的すぎる態度で仕事に臨み、まわりとの温かみある人間関係を結ぶことが出来ないなどの心理状態を描写する際に用いる「ネガティブ・アニムス」の状態でもある。ネガティブ・アニムスとは、女性のアニムスが一定のほどよい状態を保つことができず、否定的な状態に転じることにより、結果的に女性本来の心理状態からかけ離れた、時には破壊的すぎる結果に導く状態になることである。先に検討したアマゾン類型が強くなりすぎる状態の危険性と、アニムス憑依の状態はいろんな意味において重なった状態であることが分かる。したがって、アマゾンとはアニムス憑依と同様の状態にある女性の心理を、一方は意識の方から、またもう一方は無意識の方から眺めた風景である、といえる。したがって、トゥーランドット姫や夜の女王の心理状態はアニムス憑依の状態であるともいってもいい。

最後に、女性性と男性の無意識（アニマ）と、女性の無意識（アニムス）と男性の意識の関係について少し触れておきたいと思う。T・ウォルフは自身の分類した女性性が男性の無意識であるアニマに対応するとし、E・ユングは自身

の提示したアニムスを男性の意識に対応する概念であるとした。両者の指摘が意味するところは、女性にとって男性の心、男性にとっての女性の心は実に謎めいたものであり、男性と女性はそれぞれの無意識に眠るイメージを介してのみ異性を理解できるということでもあると思う。アマゾンの女性心理である論理性や競争原理が男性にとっては意識の領域に属するエネルギーであり、アニムスに憑依された女性は本来自分の本質であったはずの豊かな情緒や感性とかけ離れた心理状態にある、ということでもある。そういう意味において、トゥーランドットと夜の女王は、オペラの中では怒りと攻撃性だけが際立って描かれているが、それ以外にも彼女たちの心理を支配しているエネルギーは多分に男性意識的なものであって、男性性の要素として考えられている合理性、能動性、判断、思考、分析力などの資質も彼女たちにとっては親和的機能だろう推測できる。反対に彼女たちがアニムス的エネルギーに取り憑かれているために、女性本来の資質であるとされる受容、共感、融合、協調、感性などの心理的要素は彼女たちの意識の影に追いやられているとも推測できる。

物語の中の人物の意味するところを理解することは、生物学的な側面の理解だけでは不可能であり、意識レベルの心理理解をも超え、象徴的な次元での理解を目指してのみ可能である。象徴的次元での理解とは、すべての心理学的物語研究においていえることだが、物語の中の人物や出来事を現実の出来事の表象的変形として理解することではなく、現実的レベルに還元し解釈するのもない。分析心理学における象徴とは、無意識的内容を意識のレベルに表出する際に用いられるイメージを意味する。当然のことながら無意識・無意識的エネルギーには本来

の姿はなく、外的現実の中にあるものの姿を借りる形で自らを表現するしかない。したがって、最良の象徴ですらその本来の無意識の姿ではないといわなければならない。物語の中の人物や出来事を象徴的なレベルで理解するとは、「物語に描かれていることは、例えば、こういうことである」といったメタファーとして理解する、ということである。すなわち、物語の中に登場する女性は現実の生物学的女性ではなく、女性性としかいいようのない無意識の内容を女性の姿に例えたメタファーである。トゥーランドットと夜の女王を、実際の臨床的援助の対象である被害を被った可哀想な女性として理解するのではなく、女性の心に眠る自身の運命、言い換えれば女性としての自然な心を抑圧させられた心理のメタファーとして理解されるべきであり、それが象徴性の本質である。ここにトゥーランドットと夜の女王を被害者の女性としてではなく、人間としての男性を拒否し男性的社会をも憎む心理の象徴として理解しなければならない本質がある。

## 文献

- 1) C.G. Jung, Collected works 9i, para460
- 2) C.G. Jung, CW., 9ii, para41
- 3) "Structural Forms of the FEMINE PSYCHE", Tony Wolff, translated by Watzlawik, C.G.Jung Institute, 1992
- 4) 『内なる異性－アニムスとアニマー』、Emma Jung 著、笠原嘉・吉本千鶴子訳、海鳴社、p.9、1976
- 5) 『「アマゾン」としてのトゥーランドット姫』、禹鍾泰、「臨床心理研究」－京都文教大学心理臨床センター紀要－第7号、pp.107～112、2005
- 6) 『ブッチーニ、トゥーランドット』、小瀬村幸子訳、オペラ対訳ライブラリー、音楽之友社、2001
- 7) 『女性の深層』、Erich Neumann 著、松代洋一・鎌田輝男訳、紀伊国屋書店、1980
- 8) 『モーツァルトとフリーメーソン』、キャサリン・トムソン著、湯川新他訳、法政大学出版局、1983
- 9) E. Neumann、前掲書、p135-137
- 10) E. Neumann、前掲書
- 11) 「フリーメイソンと錬金術－西洋象徴哲学の系譜」、吉村正和著 p125-128、人文書院、1998
- 12) E・ノイマン、前掲書、p142
- 13) 河合隼雄、「昔話と日本人の心」、岩波書店、p262-263、1982
- 14) 「モーツァルト、魔笛」、荒井秀直訳、オペラ対訳ライブラリー、音楽之友社、2000
- 15) K・トムソン、前掲書、p230
- 16) E・ノイマン、前掲書、p144
- 17) T・ウォルフ、前掲書、p4
- 18) 拙稿、2005
- 19) E・ユング、前掲書、p9
- 20) E・ユング、前掲書、p22
- 21) M-L von Franz、「おとぎ話の心理学」、氏原寛訳、創元社、1979

*Abstract*

## The Roots of Animus-Possession, or Negative-Animus: An Attempt at Analyzing Operatic Works

Jongtae WOO

'Amazon', one of the four types of Feminine Psyche, can be said to be a natural state of loss of the feminine mind due to its competitive and aggressive qualities. Such a psychological state can also be understood as a phenomenon called 'Negative-Animus' or 'Animus-Possession' encountered in the psychotherapeutic process. The psychological background of 'Amazon', which can be said to be the archetypal state of female psychology, was examined from the perspective of Analytical Psychology through the female protagonists depicted in operatic works. The female subjects are 'Princess Turandot' in Puccini's 'Turandot' and the 'Queen of the Night' in Mozart's 'The Magic Flute', both of whom are portrayed as possessing a hostile attitude toward men and a cruel personality. In the case of 'Princess Turandot', the anger at the foreign invaders who killed her ancestor, and in the case of the 'Queen of the Night', the man who took her daughter away, both of these have been proposed as a background of the 'Amazon Psyche'. In addition, 'Demeter', in Greek mythology, has been examined for a comparison with both protagonists. Finally, the psychological characteristics of femininity in Analytical Psychology have been discussed with reference to the perspectives of the differences between the realistic level and the symbolic level.

Key words : Amazon, Negative-Animus, Animus-Possession